

＝文学コンクール作品講評＝ 牧野節子

全候補作品のどれもがそれぞれの輝きを放つなか、「愛や魔がある I a m a g i r l」は、主人公の気持ち realism をもってせまってくるという点で、創作文のなかでは群をぬいていました。

ある日学校で「KY」という言葉を初めて耳にしたカスミ。そしてその意味を勘違いしたまま、友人を評して「KY」と口にしてしまい、言葉の本当の意味に気づいた頃には、すっかり周囲から「KY」扱いに……。

この作品は、そんなやりきれない状況に陥ってしまった女子高生の、息苦しさ、疎外感、絶望感といった心理が、きめ細かに描写されています。しかし、からっとしたクールな文体で書かれ、重くなりすぎていない点がいいと思いました。テーマを強く打ち出したいがための過剰な謳い上げは、作品を野暮ったくしてしまうおそれがありますが、それをしないところに、作者のセンスの良さが感じられました。

主人公のキャラ設定もいい。「何かに対して憂鬱になっているときは、関係のないところで優しくしたくなるものだ」という思いを抱き、通学の電車のなかで小学生にあたたかく接するカスミの行動には、共感を呼ぶ親しみやすさと気高さがあります。

後半の男子高校生の登場はいささか唐突ですが、行く先への光が感じられるラストは見事。読者に元気を与えることができる、ポジティブなパワーをもった作品でした。

「鈴虫」は、情緒豊かで深みのある物語。

主人公は高校一年の男の子。担任の教師への反発から書いた一文は「小説家になりたい」。その言葉に縛られ、小説を書くことに。けれど、なにも浮かんできません。そんな彼の前にあらわれたのは……大切な、ある人でした。

幼い頃の甘やかな思い出。心の支えとなる人を亡くした喪失感。未来への不安。倦怠と模索。青年期のそんな混沌とした心模様が、鈴虫の音色を背景に、ウエットになりすぎることなく、さらりと描かれています。涼やかで品のある文体も印象的でした。

この二作をはじめとして、今回も、力を込めて書かれた幾つもの作品と出会ったことを、とても嬉しく思います。

皆さんが、この先も自身を錬磨し、きらめきをもつ魅力的な作品を生み出してくれることを、心から願ってやみません。